

新村出全集

第十三卷

筑摩書房

新村出全集第十三卷

昭和四十七年九月二十五日 第一刷発行
昭和五十二年五月三十日 第二刷発行

著 者 新 村 出

担当編者 木 水 彌 三 郎

発行者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一九一
電話 東京 〇七六五一(代表)
振替 東京六一四一二三番
印刷 多田印刷株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

随筆篇Ⅲ 目次

松笠集

序 9

- 新日本の曙 11 新しい春 17 和の頌 21 茶道随想 23 女性の春—古
 典の新味— 28 放送随感 32 三つのL 34 「洛味」の頌 38 京なつ
 かしや 40 虹の美 43 東西漫步 48 随筆の名義 51 松笠を拾ふ 56
 梧桐の蔭 59 枇杷の花 67 いはたばこ 69 「オレンヂ」に寄す 71
 どくだみの記 73 落葉拾ひ 77 冬籠日記 84 春曉夢餘録 89 巴里
 時代の梅原氏と私 92 在米の旧友をなつかしみて—エリセイエフ君の事— 99
 藤井紫影翁を憶ふ 104 木下奎太郎君を悼む 107 さびしき中庭—浜田耕作
 博士を憶ひて— 110 藤井健治郎博士を憶ふ 112 厨川白村君を悼む 115 暮雨
 庵曉台のこと 117 『葦火』のとこめづらしさ 123 草木の愛から 126 歌
 集『開墾』を読み 128 『白沙の駅』をよみて 132 『山頂漫步』序 134
 『新緑登高』序 136 『京洛とところどころ』序 140 『松花堂』序 143 松
 笠をふすべる—駁にかへて— 145

自跋
153

五月富士

自序
157

自然とことば
159

文化贅談
164

四月馬鹿考
168

雲の名
171

とんぼ

頓筆
174

雑草の花
176

『胡麻と百合』を懷古して
179

正月の大根
181

どうだん
185

春の白鳥
189

京住の四十年
190

京都の山川を愛して
192

常寂光の平安京―新春の平凡語―
196

日本のカルチュア・センタ―
197

大

阪漫談
204

霞山公と陽明文庫
210

茂吉翁を憶う
215

白秋忌に際して
217

じやがたら供養の歌
220

チロルの女―ドレスデン日記より―
224

私の歌歴自

叙
257

玉のみこえ
292

老人の言葉
295

私の十代
296

私の信条
297

美意延年
三十八首
303

単行本未載篇

新年随想
311

虎の年の春
313

新年随想
316

新年言志
318

わが年頭

のことば
322

迎春譜
323

新春随想
325

新年の句から
330

長寿論
333

生命の不思議さ
341

その日その日
344

松の内に高祖を景

仰す
347

雲行き
352

王法と仏法
358

慈雲の臨終とゲーテ
361

おら

が春―老人の反省― 363 人道考序説 366 多説精読 370 わたしの「養生

訓」 372 和光同塵 374 夢に生きる 376 時 381

雷の話 384 季節随想 387 かゆきかくゆき 389 天界随想 394 雲の名 398

月と文学 401 曙色と夕映 403 月しろ考 407 月代と頼山陽 415 春雨

の歩道 417 郷愁の松笠 420 花の香 426 柿落葉 430 馬酔木雑記 434

松のこと 438 黒百合のことども 441 松竹梅の話 445 竹のこと 449 虎

と日本文学 451 虎と藝術 453 黒つぐみを憶ふ 456 風かをる 459 稲

の香 465 菊花雑感 468 松かさ記 472 雪中梅 475 早春雑感―梅の花・

希望の香り― 478 わが狹庭の愛樹愛草 480 老人の古典癖 484 吾庭の愛

樹 486 植物の愛 488

貴船の螢 491 鴨涯情話 493 愛惜する金閣 497 京しぐれ礼讃 501 観

光漫筆 502 鴨川をなつかしみて 515 詩の家にて 520 寺町筋逍遙遊 522

先斗町竹枝―業平餅恋懷梅― 525 千枚漬の味 529 あのだこの道 530 春日 532

東斎つれづれの記 535 ほほあみながら 538 瘦柿舎より 541 山頭火を

愛慕しつつ 545 思ひ出るまゝに 548 茶の間の春 550 わが養老日記よ

り 552 東斎日記 555 瘦柿舎だより 562 早春日記 564 パチンコ屋の

前 568 幾荒潮―ウィルソン号の船出に― 570 プレジデント・ウィルソン号の

船出 575 紫明学区に住みて 577 ふるさとへの初便り 579 久能山の時

計の思ひ出 580 冬ごもり春 581 猫と吾輩 585 紫明新路の散歩 590 額
 と掛物 591 応無所住而生其心 594 末の松山 597 清少納言を愛して 600
 文化する 602 藝に遊ぶ 605 文化偶談 609 わぎもこ雑記 611 赤外線 615
 瘦柿舎一夕話 621 白足袋考 625 アマゾン南望 628 師走談義 631 宋
 裏の仁 634 いろはかるた雑考 639 歌のリズム 641 京の夢 大阪の夢 644
 文化の日に寄せて 646 婦人の名前 649 色の名 652 東と西 654 名実
 の一致 657 ことば 660 ラオスの今昔 662

解説

木水彌三郎

新村出全集 第十三卷 隨筆篇Ⅲ

松
笠
集

序

人々の厚意によつて、又一つ随筆集がふえることは、ありがたいことである。孫がふえてゆくよりも随筆集の方が、たわいなく出来上るのは、何やら恥かしい気もするが、とにかくいづれも嬉しいのは自然である。

集が一つ成るとき、一つの楽、勞なのは名をつけることである。苦勞ではなくて、楽しみだから楽、勞といひたいのである。ひとり会心のこともあれば、あとで意に満たぬことも往々ある。とつおいつ、迷ふ間がおたのしみなのである。このお正月に、十一番目の孫が生れて、それに恭の字をつけ、ヤスシと訓ませるやうにしたとき、老痴の閑人、古典に照らし、現代を鑑み、迷ひつゝ独楽にふけり廻つたことを思ひ出す。

この晩春に、一老友から、花咲く一人静を一株もらつたので、それを鉢に植ゑて軒下においた。しをれたので、山妻が今度は青木の下蔭に、地面におろしてやつた。処を得たか、勢よく育だつてきて、来春の静寂な花を予想されるやうになつた。そこで私はこの新刊随筆集には、一人静と題しようかと思つた。本の名としては、さびしすぎはしませんか、と家内の感想もきこえた。それを聞いたわけではなく、相談相手の木水さんは、宇陀の松山から書を寄せて、二人静となさつたら如何でせうと、思ひやりの深い愛語を私たちに投ぜられた。

それならば、むしろ『松笠集』としようと一決したのは、昨年から愚にかへつての稗氣止みがたく、鱗片の重量して開いてゐる松毬を愛玩しつつ独りゑつに入つた挙句に出たのである。木水さんも大に喜んでくれ、旧作の松笠の詩一篇、四行詩四節より成る所の佳什を与へられた。津の国の海のほとり、母びとにしばし離れて、をさな子の

ひとり遊びて、朝かぜに落つる松笠をひろひあそびし想出は、私にも通ひ来る情緒が切である。

茶を愛する河原さんも、この物の渋味をよく悟得して直に賛同されて、やがて原稿を印刷に附するといふところまで進んだ。象徴詩人レニエが、「松^{まつ}毬^{やう}一つ一つに投げこめば、足れりや足れり」と詠んだ炉火の詩をも、木水さんは摘抄して送られるまで、更に好意を加へられた。両雅友への深謝の情はつくせない。この冬、その炉火にふすばる薄紫の煙をゆめみながら、この序文をかく。

昭和丁亥立秋前二日

小山居主人^(二)

(一) 中川一政氏画扉紙対頁に左の書入あり。

昭和二十三年七月二十七日あさすこのころ

待ちわたりし此本を届けられて

老人ども手にとりみつよみみつせる

たのしさに即興一句

朝涼や落ち松毬の二つ三つ

重山子

新日本の曙

世阿彌の作に「難波」といふ謡曲がある。時は正月、所は大阪、「難波の梅」とも古く美称せられた祝言能で、梅の名木に材を資り、百済から渡来して日本に『論語』などを伝へた王仁をシテにした名曲。能ではまだ見たおぼえがないが、詞曲には佳句が多く、本年の異例の正月には更めて愛誦して楽しんだのである。

後シテになつてから、「誰かいひし、春の色は東より来たるといへども、南枝花始めて開く、云々」といふ詞。それから「春鶯囀」といふ曲について、「夜の舞樂はおもしろや、夢ばし覚ましたまふなよ、夢ばしさましたまふなよ」と謡ひをはると、地がそれを受けて、「入日を招き返す手に」と繰返して吟ずる辺りが特に意をひいた。シテは老人である。前段の終りの方で、その老人に向つて、当今の臣下たるワキが、「いかにこれなる老人に尋ぬべきことの候」と梅の樹や「春鶯囀」のいはれを問ふ所があるので、この古稀叟もいよいよ悦に入つて、さてこそ此の一文を草する心がはずんで来た。

これまでを序曲として、いざ本文に入るが、本年の元旦に拝承した終戦後の第二の大詔は、文質共に曠古の重要なものであつて、国民の感佩はもちろん、聯合國がはへの反響も異常であり、マックアーサー元帥の満足も亦宣明された通りである。大詔は平易なる文体の裡に、卒直に深厚なる聖旨を表現したまひ、国民の今後向ふ所を指示せられつつ、国民既往の過誤を矯正して下さつたこと、新日本建設の方針を垂範したまうたこと、有難く服膺すべき有史以来の聖勅と申し上げたい程である。

さて此の聖勅が年頭において一年の計としてお諭しになつた事が、実は百年、千年の大計をもお示しになつたものと解して差支ないのであるが、聖諭の渙発と同時に宣布されたマックアーサー元帥の年頭声明も亦われわれ日本国に対する懇切なる言辞として敬誦されたのである。文辞は平明にして簡潔、われわれは天皇陛下の大御心とおのづから相共鳴される元帥の信実なる厚意を感じざるを得なかつた。この点から見ても、日出国の天子と、東光国の元帥と期せずして相呼応せるが如く此の元旦に宣明せられた二大文辞に対して、私は並々ならぬ情熱をもつて繰返し何度も何度も愛誦して止まなかつた。

「新しき年は来た、新年と共に日本にとつては新しき暁が音づれた」といふ文句から始まり、「新年が日本人民にとつて、その践むべき道と、真実と、光明との第一歩にならんことを希望する」と結んである元帥の文章は、恰も万葉歌人の長歌に対する反歌をよむが如き感をいだかしめる。元帥の平坦簡明なる詞句は含蓄に富み、われわれを引きつけずにはおかない。

「朝日」の訳文でよんだ此の結句を、原文でよんでみると、道と真実と光明と、この三つの文字が引用句になつてゐて引用符が附けてある。蓋し『新約聖書』の「ヨハネ伝」の第十四章の中の一句に拠つたものと察せられるが、私に学生以来最も親しい「ヨハネ伝」をば偶然にもこの年末年始に熟読した私は、信徒でこそなければ、その全編を味読して時艱に対する光明を感受し、一種の金光明ともいふべきライトに浴し、新日本の新生命ともいひたいライフを喜ぶ心地に達した。これは老人吾に残る童心から来たのかも知れない。

キリスト教とは平素没交渉に近き身ながら、然し万ざら無縁でもなかつた私は、大学生時代にギリシャ語をケール先生から学んだ時、或る学期に「ヨハネ伝」をテキストに使はれたことがあつた。『論語』でも『孟子』でも、『万葉』でも『源氏』でも、巻頭の文句は誰しもよく記誦してをるものであるが、御多分にもれず私も「ヨハネ伝」の起首の二句はギリシャ語でも覚えてゐる。殆ど五十年前であるが忘れない。そんなことが偶然の因縁となつて、

マックアーサー元帥の引用句がこの福音書に思ひ当つてうれしかつたわけである。

私の尊信する聖徳太子が仰せられたか、日出国といふ国号に対して、今姑く東光国といふ新称を元帥の本土に冠らせてみた私の思ひ附きが容るされるならば、「春の色は東より来たる」と「難波」の謡曲をも想起される遠西の金言の「光は東方より」といつて日本人の口にも膾炙してゐる成句が示唆するが如く、かの年頭の祝辞は日本国民に向つて、道と真実と光明とを指示し、新生命を賦与する所の、感銘すべき文字であると申してよからう。

更に私の夢を覚まさないでもらへるならば、元帥の日本国民鼓舞醒の詞句の中には、年頭の聖諭の中の国民訓戒激励の箴言と極めて密接に連繫せるものがある。敢て註釈を加へるの要なきほどに、明瞭にして自得され易いから一々対照しないが、懇々となされた所の御教訓、率直に明示してくれた所の道理の福音、共に拳々われわれの服膺すべき金言だと申したい。豁達なる世界人として、達識なる日本人として、虚心坦懐にこれら長短二章を併せて敬誦するもの、誰か同感共鳴せざるものがあらうぞ。

マックアーサー元帥を私は曾て南洲先生に比したことがあつた。これはむしろ維新の際における先生を、私ども旧幕人の先覚者にして且つ先考黙斎の先輩たりし海舟および鉄舟の両先生との關係に立つた角度から見てのことであつた。終戦後程なくおちあつた年寄りの隠居軍人の一人に此の内外の両雄の対比を試みたことから端緒を發するが、実は旧友木村毅氏が緒戦時代にマニラを訪ねてマ元帥が去つたあとと官邸の居室で印象を受けた逸話を再度その名放送で聞いて、元帥の為人を知り、その好印象が先入主となつてゐたのだ。南マ両偉人の対比が、平素とかく比較好きの自分に、ふと思ひついたさういふ由縁に過ぎない。明治天皇の御殊遇を賜はつた所の徳川慶喜公、私たち旧幕臣、「今は擯斥されてゐる封建將軍の遺臣」、それらの旧主人たりし十五代將軍と連想されがちの氣宇豁達にして寛厚なる西郷南洲が思出されたのは、自分だけには自然であるのだ。

そのの当否はさておき、私は毫も南洲先生をその晩年に結びつけて茲に対比したわけではないことは、殊更にこ

とわる必要はなからう。況んや予てから景仰の念をもつてゐる東光国の英傑に向つて礼を失する筋はないと信ずる。要は両者を偉大なる教育指導者として敬重したに外ならなかつたのである。

なほもう一つマ元帥の年頭告辞の首めに、「新しき暁が訪れた」といふ句がいたく私の興味をそそつた。これは「朝日」に掲げられた、訳文に由つたのだが、これも「英文毎日」の原文でよむと、「新しき年が日本に明ける」といふ文意であつて、明ケル、又は、暁ケルの原語は、英語のドウンズとなつてゐる。暁また曙をさす名詞ドウンの動詞形である。即ちアカツキ又アケボノといふ名詞は、国語においては、夜が明ケル、夜が白ムといふ場合のアケルやシラムの如く動詞形を其のままには持たない。ドウンの動詞は、今さら珍しがつて仰々しく説くほどの語ではないけれども、とにかく動名両詞に共通であることが、私たち比較言語学者を興味づけたのである。ここで煩瑣な考証を試みることは控へるが、漢詩や漢文をよみ味つても、支那の新古の字典を検しても、又日本の『新撰字鏡』や『類聚名義抄』に照らして見ても、暁の字、曙の字、普通はアカツキ（古くはアカトキ）アケボノと訓してゐるが、古訓では二字ともアケルといふ様に、英語ドウンと同様に動詞によまれる方が本体であつた。アカトキ又アカツキの方が一段と古く、アケボノの方は後世の新造語であるばかりでなく、暁の字の方が、より早く、より頻繁に用ゐられ、而もアケニケルカモとか、アケクレバとか、アケユケバとか云ふ様な工合に動詞の形に、『万葉集』では用ゐてゐる。『古事記』では、曙立王といふ皇族の名をアケタツキミと訓じてある。曙の字は、『万葉』五の巻の旅人または憶良の梅花三十二首歌の漢文序にみえてゐるのに止まるが、アケボノの国語は、平安朝初期以降の『日本書紀』の古訓に頻出するまでは、『万葉』や『記』『紀』の歌にも見えず、平安朝に入つても、歌語としては、『三代集』には未現。やつと『金葉集』以来の散見であつて、『千載』や『新古今』に至つて、漸く多見するといふ有様。散文では、『源氏』に数箇所、『枕草紙』の巻首にかける「春は曙」といふ名句は、私のここに摘出するまでもない。それが保守的な歌語としては、一二世紀おくれで行はれたのが、新古今時代になつてから急に盛行するやうになつたのである。